

中野利子 教師たちの悩み唄

10の人生
ドキュメント



83

中野利子

教師たちの悩み唄

10の人生ドキュメント

筑摩書房



中野利子（なかの としこ）

1938年、東京に生まれる。慶応義塾大学文学部卒業後、私立高校教員、公立中学校教員、定時制高校教員、産休補助教員などを経て、現在、フリーライター。著書に『君が代通信』（筑摩書房）、『教育が生まれる——〈草の根〉の教師像』（筑摩書房）、『カツオ・お母さん・共同保育——脳性小児マヒ克郎くんの記録』（鶴の森書房）がある。

教師たちの悩み唄

——10の人生ドキュメント

1986年7月15日 初版第1刷発行

著 者 中 野 利 子

発行者 布川角左衛門

発行所 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町2-8

郵便番号 101-91

電話 291-7651（営業） 294-6711（編集）

振替 東京 6-4123

©1986 TOSHIKO NAKANO Printed in Japan

ISBN4-480-85319-7 C0037

印刷・多田印刷 製本・永興舎

目次

その1 親指が痛い 3

教師受難の時代
なかじきり・1 36

その2 「あらあ、禿げてるう」 46

その3 自分でよみがえる 57

その4 途中下車校長 78

昔がよかったとはいわないが……
なかじきり・2 90

その5 花が心につきささる 99

その6 「弱い者」になって 109

その7
子どもらとの別れ

130

しろうるりさんの思い出

なかじきり・3

162

その8
救いの島

168

その9
ジャズ喫茶

179

その10
告訴して

198

曇りのち晴れ

なかじきり・4

210

あとがき

220

教師たちの悩み唄

10の人生ドキュメント

その1 親指が痛い

I

右手の親指の筋がいつも痛い。今から思うとそれが最初の兆候でした。

四月なかばから、痛みで鉛筆やチョークが持てない。学級通信は生徒たちに順番に書いてもらい、授業の板書はチョークを中指と人差し指の間にはさんで書くので、ほかの指までおかしくなる。接骨医や病院の外科の診断は異常なし。それでも痛みはとまらない。そのうち、足の踝まで腫れてきました。

人間のからだだって恐ろしい。自分でも意識しなかった緊張とストレスが、こういう形で現われていたんですね。

ええ、その当時私は公立中学校の音楽担当の女教師。四十二歳でした。教職経験二十年、まあい

えば経験者の部類だったでしょうね。自分の子どもたちも高校生になって手から離れ、張り切って仕事をしている最中でした。

四月から担任した中学二年生、自分の学級の子どもたちとの人間関係がうまくゆかず、重い気分だったのは確かです。でもあとで病欠、休職、退職といった結果になる「抑うつ状態」の最初の顕われとは、夢にも思っていないませんでした。

三年前に担任したあの学級は、最初からなにかいつもと違う雰囲気でした。新学期がはじまって二、三週間たっても、シーンと静まりかえったままで、異様なのです。生徒同士の間も、私との間も、緊張がとれず打ちとけない。「よっぽど大人を信用しない癖がついている子どもたちだな」というのが、私の印象でした。四月末の定例父母会では、母親たちまでいつになくよそよそしい。どうしても気がかりで、その夜思いきって前に弟を担任したことのある親の家に電話をしました。親たちって、意外に私たちの知らない街の噂を知ってるものなんです。

「実は先生、先生のあの組は小学校時代の番長クラスがみな集まっている大変な組ですよ」と告げられました。

一年生の時には、全体としておだやかな学年でした。社会見学にでかけるバスの中で中学三年生がお酒を飲んで暴れるほどに大変に荒れた中学校から転任してきた校長が、そのストレスが原因の高血圧がここに来てなおったと喜んでいて、静かでこれといった問題の起こらない普通の学年、学校でした。

でも考えてみれば、中学生って二年生から荒れだすのですよね。からだも成長し、成績による無言の選抜も浸透してゆく。教員の行為の理不尽さもぼんやり見えてくる。なにかむしゃくしゃして

くる……。

今から思えば、嵐の前の静けさでした。一学期末の試験の最中に、最初の動き、「筆箱落し」が起こるまでは――。

一学期末テストの国語の試験、ある英語の先生が私の学級の監督にあたっていました。同業者としていいにくいのですが、出来る子だけを相手にして判りが遅い子どもはどんどん冷酷に切り捨ててゆくタイプの教師です。私の学級にいた「つっぱり」のうちの一人が一年の時に授業を受けており、その人への復讐が企てられていたのです。一年間その先生から無視されつつづけてきたA君のひそかな合図で、試験時間がなかつ過ぎた頃、全員が一斉に机の上から筆箱を床に落しました。「先生、筆記用具がないから拾わせて下さい」。十何人が口々にいって学級中が騒然となったそうです。それを皮切りに、林間学校の服装の規則きまりをめぐる「反乱」。林間学校へゆく途中のバスの中で数人が突然花火をやり出し、運転手さんに「なんという危険なことを！」とカンカンに怒られる……。私、きりきりまいをして対策に追われました。そして、学級に六人の「つっぱり組」が存在することがわかったのです。

四十名あまりの学級のうち、六人の派手で傍若無人の「つっぱり」が存在すると、ほかの子は恐怖で萎縮してしまうのですね。からだの大きな男子中学生六人が、抑制をはずし、からだを張って行動をしたすと、教師の体験のない方は想像できないかもしれませんが、それ自体で集団なんです。ある威圧感を与える「群れ」なんです。「つっぱり組」の中には上下関係もある。たとえばC君、彼はひどく気弱な無気力な子で、いらいらしている他の「つっぱり組」の腹いせのいじめられ役を

引き受け、彼らの命令通り動くことで「つつばり組」の中に位置を占めている。自分の存在理由を見つけているんです。バケツの水を頭からかけられる、お菜かずのおいしい時の給食を食べられてしまふ、持ち物にきびしい先生の時間にノートを隠される、トイレに引つ張りこまれ、次の時間に騒げとか誰かを恐喝しろと命令される、消したばかりのまだ熱いマッチの先を手の甲に立てる根性焼きこんじようをやられる……。ほかの子に同じことをする手先きにもなる。

そんなグループが学級に君臨し、しかも実によく団結していて（学年で二十名ほどの「つつばり組」は、あとから思うと実にみことな連繫プレイをしていました）、それ以外のほかの子どもたちはみなばらばらなんです。

夏休み、あの子たちに会いにゆかなくてはと思いながら、どうしてもからだが動きませんでした。残暑のきびしかった九月一日からの二学期、さっそく、最初の日、氣にしていた六人が学校のトイレに隠れ、そろって校庭での始業式に出なかった。今の学校って、こういうことが大問題になるんです。一人ずつ呼び出して理由を尋ねる、叱る、説教する。当然、彼らはますます反抗する……。その日から、精神科医のもとを私が自分から訪れ、「即日欠勤」の指示を受けた十一月十五日まで、くわしく全ては思い出せませんが毎日、次から次へと事件の連続でした。無我夢中でその対応に追われているうちに、夜、安眠できなくなりました。疲れ果てているのに緊張が緩ゆるげず眠れない。眠っても、寝ていない。学校であったこと、これから起こるであろうことを夢に見続ける。朝起きても熟睡感がないから、さっぱりした気分にならない。頭を締めつけられるような重い気分のまま、義務感だけで学校へからだを運んでゆく。起こる事件に機械的に、哀しさと重苦しさと義務感で対処してゆく。

ことに「あの日」から、私はふだんとは違う私になっていました。地面に足がついておらず、まるで夢遊病者のよう。そして学級の中の「問題児」だけに意識と神経が異様に集中してしまつて……。

新聞記者の方々は私の発病の話をきいて、「担任の男子生徒に殴られたショックから」と「あの日」をセンセーショナルに書かれるのですが、そうではないんです。私の「あの日」はもっと前です。その日ではないし、「殴られた」日には、もうすでに私は限界に近いほどよれよれになっていたのです。

確かに、殴られたのは欠勤する数日前のことです。でも、殴られたといっても子ども同士のけんかの仲裁に入つて……、「けんか」といったら正確ではありませんね。その頃いくつかのクラスで手のつけようがなくなっていた弱い者いじめの仲裁に入つて、そのとばかりで殴られたのです。

その日、「つつぱり」のB君が朝の一時間目から、毎時間、授業中、ずっと隣席の気の弱いS君をボクシングの手つきで殴りつづけていました。殴られているS君も、痛がりながらも抵抗しないで耐えている。抵抗するとかえつてひどくいじめられる。その経験がくりかえされていたのです。

だからその日もじっと耐えている。まわりの生徒も毎度のことだから、見て見ぬふり。朝からどの先生が注意しても止められなかったそうです。B君は柔道部に入っていて、太つていて、学年一、からだが大いのです。六時間目の私の音楽の時間、私は見るに見かねてそのB君のいじめボクシングにからだでわけて入つて止めようとしたのですから、とばかりで殴られたのは自然の勢いなんです。

B君は「うるせえ！ あっちへ行け！」と怒鳴りながら、私の左頬を、次に鳩尾みぞおちを拳骨で殴り、腰のあたりに蹴りを入れました。

女性である私が殴られたからでしょう、さすがに女子の数人が止めに入り、B君は暴力をやめ、無言のまま、のっしのっしと教室を出てゆきました。しーんとなった教室で、私は、多分消え入りそうな声だったのではないでしょうか、「こんなんでは授業はできない」といったように覚えています。女子の一人が、「なんでこういう時、男子は止めないの？」と詰問すると、M君が「男が止めてみる、半殺しの目に遭うんだぞ！」と答えていました。「つつばり組」以外の男子全員の実感だったでしょう。

一体、私のからだの痛みはどうだったのか、あまり覚えがないんです。それよりも、私を殴っている時のB君の眼、殴りながらもなにか訴えるような、助けを求めるような、なんともいえない切なさそうな目つきが心に残りました。放課後、B君は「さっきはどうもすみませんでした」と職員室に謝まりにきましたが、この時は目つきもおだやかでなく、職員室の扉をぼんぼん蹴とばして出てゆきました。なんと私が答えたのか、それも覚えがありません。もう私は朦朧もうちやうとしていたのですね。

この年度まで、私は教師の中でも、人間に対する愛情、ことに弱い者への愛情は人一倍持っている方だと思っていたんです。ぐれたりつつぱったりする子どもたちの味方だと自信を持っていた。数人のぐれた子どもたちにギターを教えてフォークソングの演奏の主役にして自信を持たせ、立ちなおらせた経験もあります。音楽おとの世界の素晴らしさを子どもたちに伝えたいと、全員が集中できるように工夫して、神経を張りつめて一生懸命音楽の授業にも取りくんできたつもりでした。

ツメタイ教師というのは、子どもたちを静かにさせられるんですね。なにかするとなにかされるのではないかと、子どもたちは恐怖と諦めから我慢する。じっと大人しくしている。でも私は自分でいうのは変だけどやさしいタイプの人間だから、担任をすると、子どもたちは甘えて、心をゆるしてわぁーっと騒がしい学級になってしまう。でも今までは最初はそうなくてもそのうち私の誠意が通じて、だんだんまとまりのある落ち着いたクラスになってゆきました。親たちがとても喜んでくれる卒業式の全員合唱にもとりくんできたし、全体としては自信があったんです。自分を弱い人間とは思っていませんでした。

音楽学校のピアノ科を卒業して、本当はピアニストになりたかったけれどどうしても力量不足、才能不足。故郷の山口県に帰ると気のすまぬ縁談が待っていたので、急いで上京。とにかく食べてゆくために教員になったのでした。でもはじめてみれば、やりがいがあった楽しい。気持の張りをもって仕事をつづけてくれました。

もちろん、私は教師にむいてないんじゃないかというジレンマはどこかにありました。

やさしすぎるのが私の欠点でしょうか。神経質などいいほど、私は子どもの表情が見える質だたちと思います。「子どもの見える教師」だと思ってきました。でもだからこそジレンマもあるのです。

たとえば今の学校でいわれている服装や持ち物についての細かい規則きまり。私、あれ苦手たがてなんです。髪型、ズボンの幅、スカート丈、眉毛の形、髪に油を塗るかどうか、鞆たがにどんな漫画や文字をいたずら書きするか……。そんなものを厳しく取り締ることに関心がないんです。私自身の性格はそんなものは見逃したいし、実際よく見えない。相手の表情しか私には見えない。見たくもない。でも、

学校の中の教員の一人として、自分自身が心から納得いつてないことでも学級の子どもたちに守らせなければならぬ。ジレンマのひとつです。もっと自由奔放でいたい、とよく思いました。荒れた子たちは、はじめ、みごとに私のこの弱みを衝いてきました。

そう、今になってわかる、私が私でなくなってしまった「あの日」とは、九月のなかば、始業式ポイコットから半月後になります。

定例の親・子・教師の三者面談が行われ、授業中に奇声を発したり、突然立って教室中を歩きまわったりするグループの行動をそのグループの一人のD君のお母さんに話していた時です。D君が急に大声を出して「手前^{てめえ}なんか先生やめちまえ！ 死んじまえ！」と私に怒鳴ったのです。お母さんがオロオロして「あんた、先生にむかって何をいう……」と止めると、今度は母親にむかって「黙ってろ、くそばあ！」。すぐにその日の夕方、D君はグループの全員に報告したのでしよう。翌朝の学活（学級活動、いわゆるホームルーム）の時間に私が服装についてだったか学校からの連絡事項をみなに伝えていると、グループの彼らが私にむかって口々に「先生なんかやめちまえ！ 死んじまえ！」と罵るのです。

私はその時、表面は平静にこやかにしていたのですが、心の中ではすぐに口が利けないほどのいいようなないショックを受けました。性格が強くすぐにその場で強い反論や叱責ができる人ならよかったのでしょうが、私は駄目でした。その時、私の中のなにかが粉々に砕け散ったのです。不眠も進み、神経も疲れ、弱っていた最中です。満州からの引揚げ、父親のシベリア抑留と生活の苦勞はあっても一人娘で育ったから、内向的で言葉の暴力に慣れてないんですね。その場で反論でき

ず、全部中に一人で抱えこんでしまう。駄目なんです。それで衝撃がじわじわと心の中に、沈みこんでゆく……。

すぐにそれは外に顕われないから、彼らはどんどん私にぶつかってくる。今はわかるんです。ちょっとと荒れ始めると目をつけられ、叱られ、懲罰のためのクラブ活動停止や往復ビンタをくらう（朝礼の最中に生活指導担当の教師から、壇上で全校生徒の面前で殴られたこともある子たちです）。家庭にも心安まる自分の居場所がない。「やさしい」私は、そのいらいら、をいちばんぶつけやすい相手だったのかもしれない。私は私で、復讐したがつているこの子たちの気持がわかると、迫力のある叱り方ができなくなっちゃう。でも教師としてそれじゃ駄目と思うから「教師面」で叱っちゃう。この教師面を見抜かれるだろうなと心の隅のどこかで思いながら「まともな」お説教をするから、あの子たちはますます荒れてゆく。私の中にもストレスがたまる。

それに「あの日」からなにかもう私はふだんの私でなかったから、すべて空回りしていたのでしよう。

「あの日」から不眠が次第にひどくなりました。自分が自分でないような感じ。現実の世界に自分はいないような感じ。金縛りにあったよう。デクノボウのようで、自分の意志が失くなった。

朝だから学校へ行く、担任だから教室へゆく、次々に目の前に出現してくる事件に機械的に対応してゆく、叱らなければならないから叱る、伝えなければならないから伝える。怒りも喜びも一切の感情がない。食事の時間だから食べる。でも最後は牛乳しか飲めなくなりました。それでも横行する弱い者いじめが私がいれば少しはなくなるかと、昼休みはからだを引き摺るように教室に行って、黙って坐っていました。